

## 2. 流域及び河川の概要

山ノ井川は、矢部川支川星野川 3k300 地点の山ノ井堰から分流し、八女市、筑後市、大木町、久留米市(三潞町、城島町)を流下し、六五郎橋上流の筑後川左岸 15.3k 付近で筑後川に合流する流域面積 50.7km<sup>2</sup>、幹線流路延長 24.5km の筑後川水系の一級河川である。

流域の大半は低地部で、河川沿いの開けた土地は、筑後平野の穀倉地帯の一部をなし、圃場整備された農地を利用した稲作がさかんに行われ、河川水は灌漑期には多くの井堰により農業用水として利用されている。井竜堰より下流は有明海の干満の影響を受ける感潮区間となっている。

流域全体の地形勾配が緩く、下流部の低平地では内水被害が発生しやすいことが特徴となっている。また、山ノ井川下流端には、山ノ井(下流・上流)排水機場があり、出水時の筑後川本川水位が高い場合には水門を閉め、必要に応じてポンプにより筑後川本川へ排水している。

また、宇田貫川は、久留米市城島町江上から旧城島町市街を流下し、六五郎橋下流の筑後川左岸 14.5k 付近で筑後川に合流する流域面積 1.6km<sup>2</sup>、幹線流路延長 2.8km の筑後川水系の一級河川である。

河川の周辺部は昔から住宅が密集しており、河川沿いは公園が整備され、市民の散策路として利用されている。

宇田貫川流域は、山ノ井川流域より下流に位置しており、河道内は有明海の干満の影響を受ける感潮区間となっている。

表 2-1 河川の諸元

河川	流域面積	河川延長	合流先
山ノ井川	50.7 km <sup>2</sup>	24.5 km	筑後川左岸 15.3k 付近
宇田貫川	1.6 km <sup>2</sup>	2.8 km	筑後川左岸 14.5k 付近

筑後川流域図

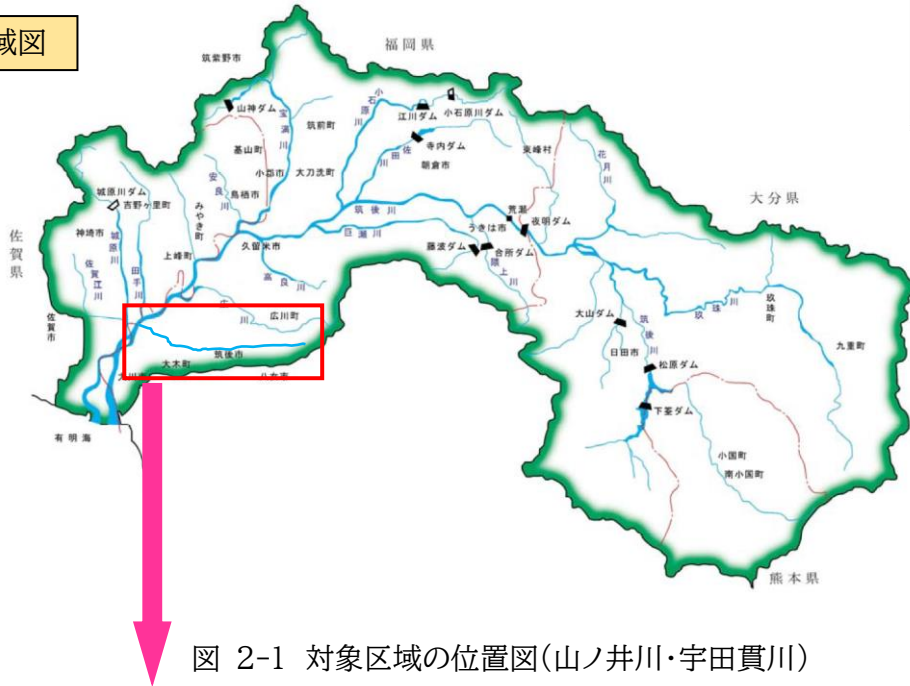
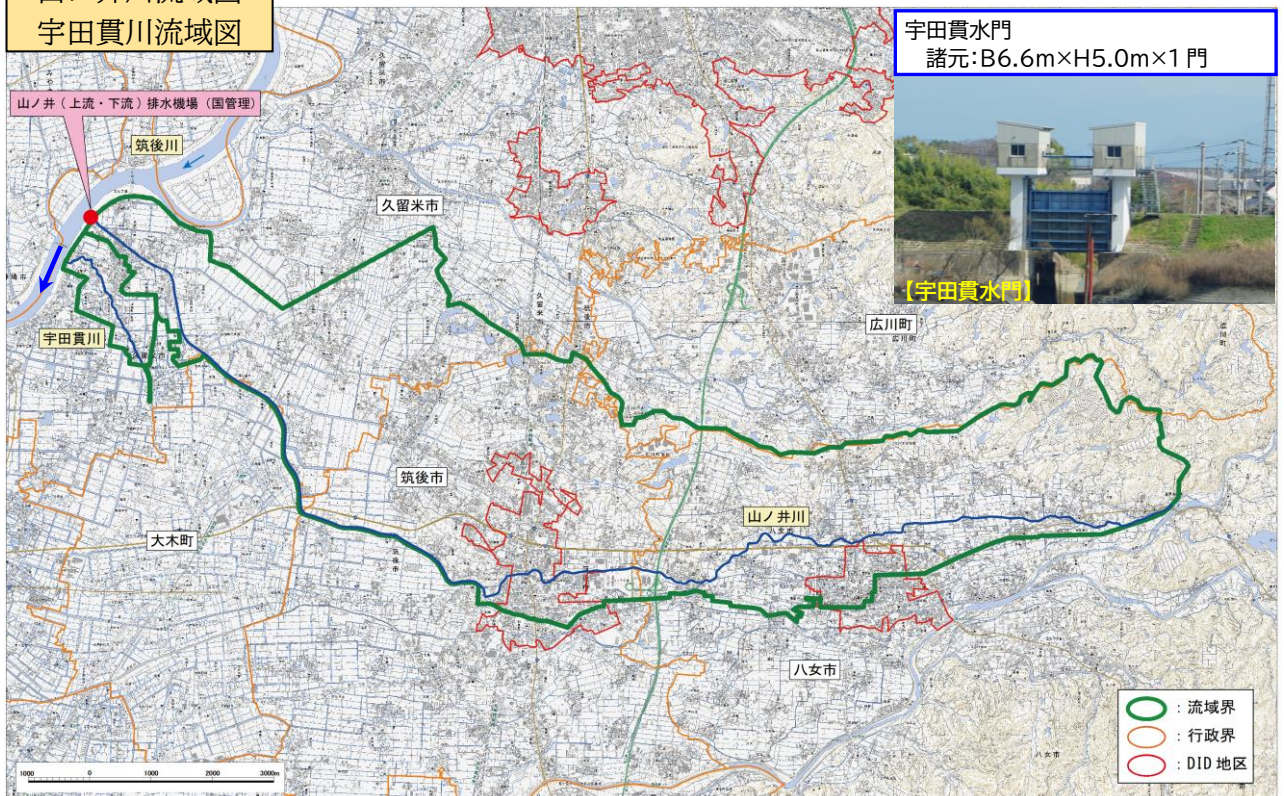


図 2-1 対象区域の位置図(山ノ井川・宇田貫川)

山ノ井川流域図  
宇田貫川流域図



宇田貫水門  
諸元: B6.6m×H5.0m×1 門



山ノ井(下流)排水機場  
排水量: 12.0m<sup>3</sup>/s(4.0m<sup>3</sup>/s×3 台)



山ノ井(上流)排水機場  
排水量: 11.2m<sup>3</sup>/s(5.6m<sup>3</sup>/s×2 台)



山ノ井水門  
諸元: B12.7m×H9.5m×3 門



図 2-2 対象区域の流域図(山ノ井川・宇田貫川)

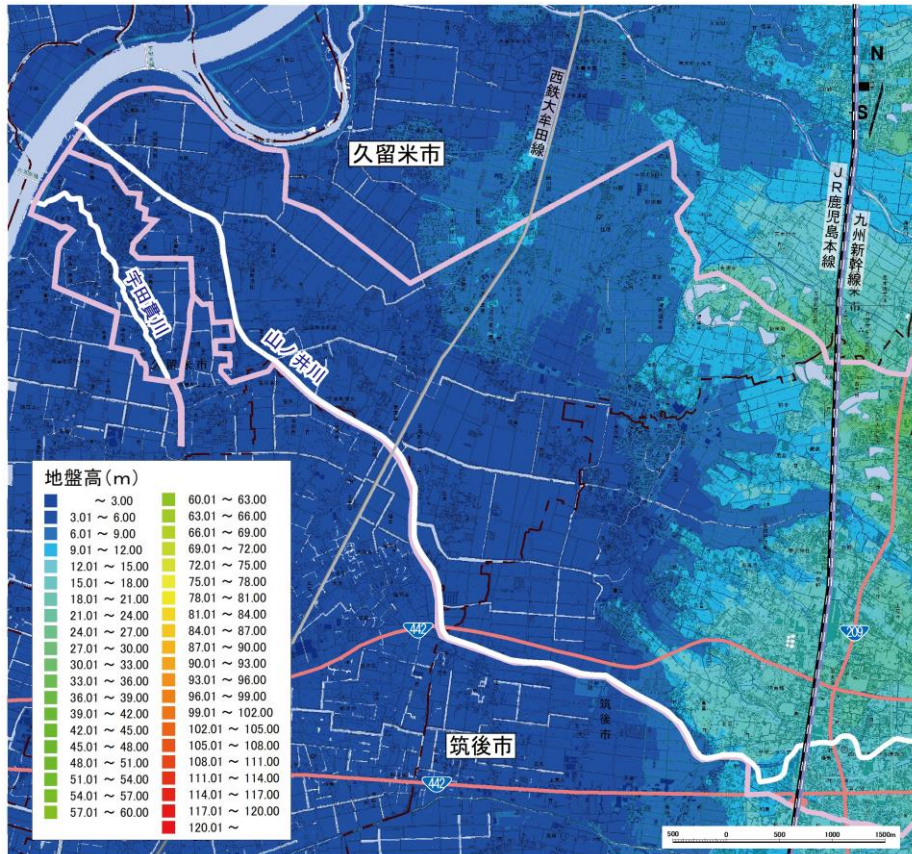


図 2-3(1) 山ノ井川流域及び宇田貫川流域の地盤高分布図

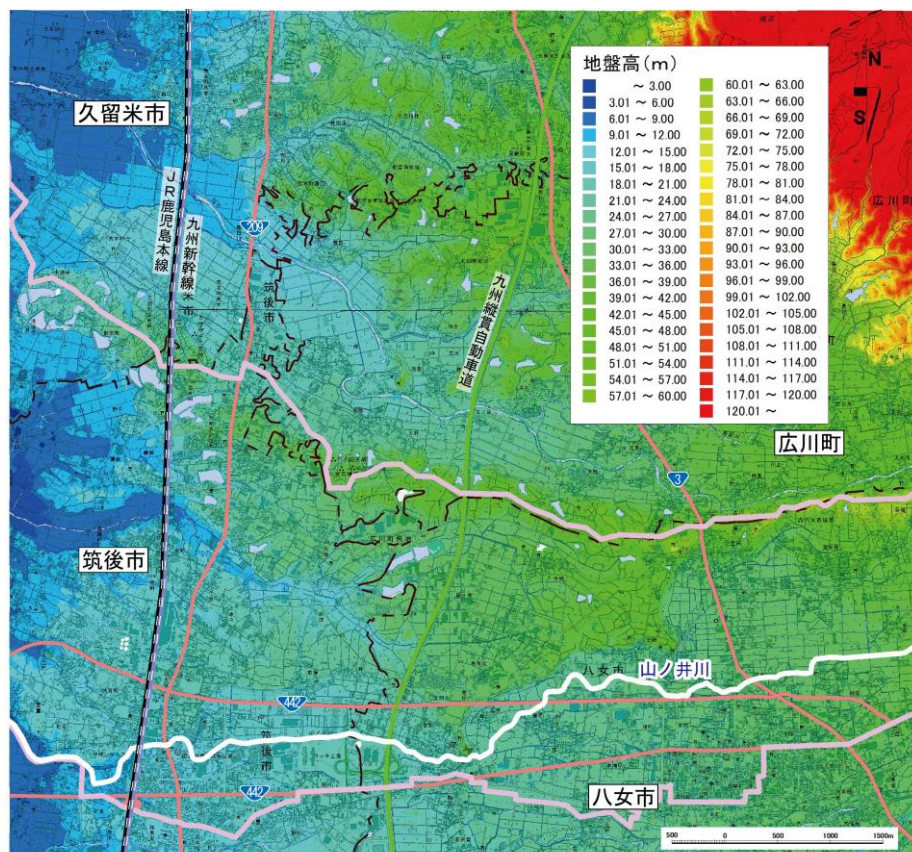


図 2-3(2) 山ノ井川流域及び宇田貫川流域の地盤高分布図

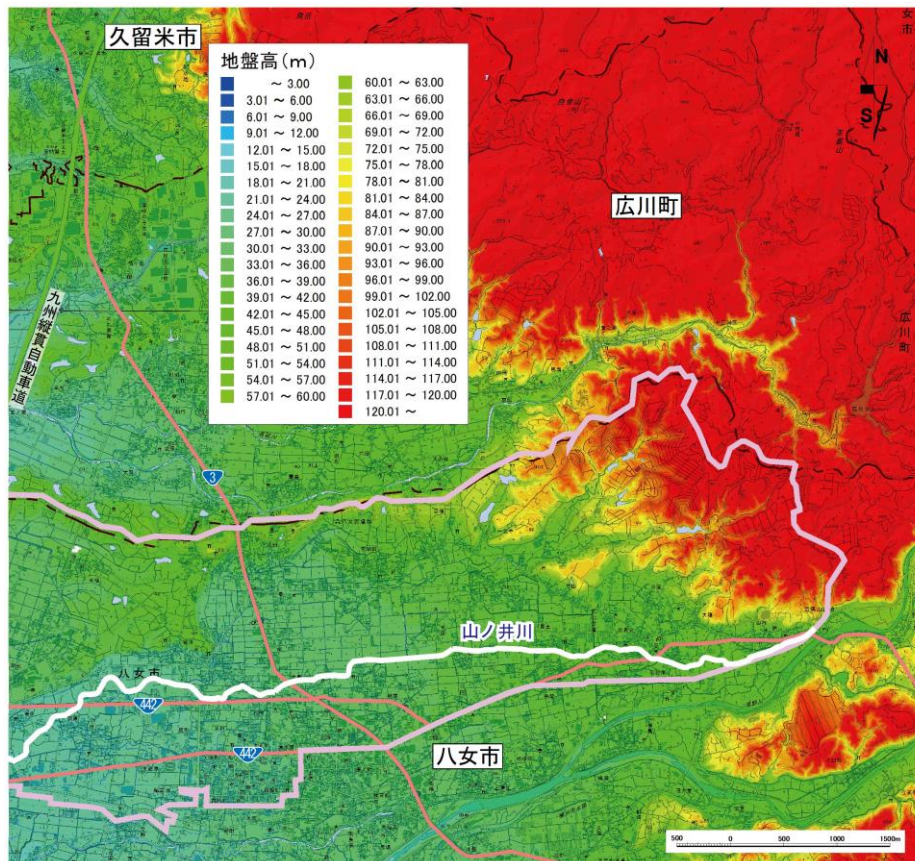


図 2-3 (3) 山ノ井川流域及び宇田貫川流域の地盤高分布図

山ノ井川流域(下流)および宇田貫川流域の土地利用の変化を見ると、昭和 55 年と比較して令和3年は、山ノ井川中流域の JR 鹿児島線沿線で水田として利用されていた土地が市街化している。

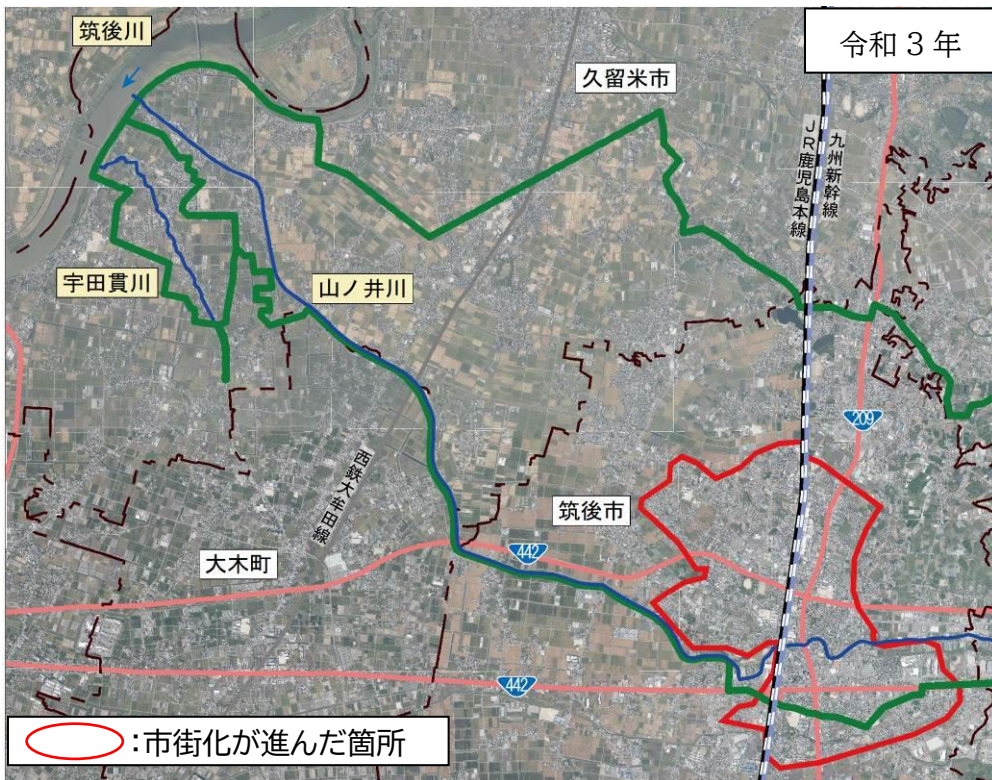
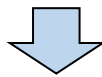
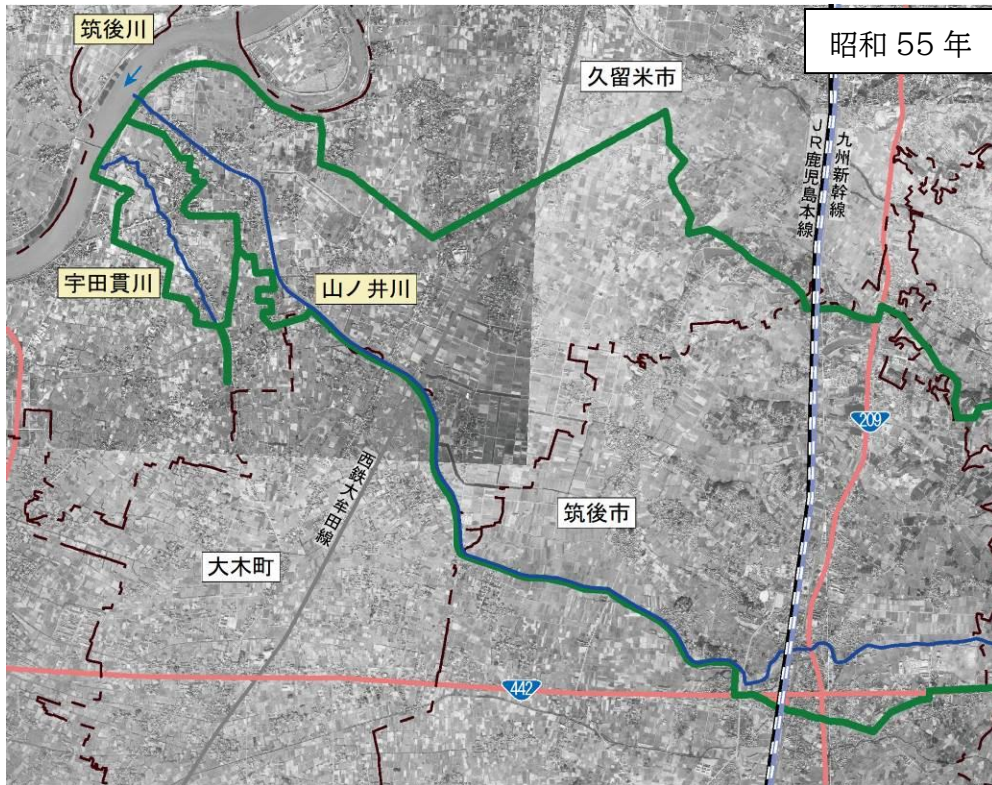


写真 2-1 山ノ井川流域(下流)および宇田貫川流域の土地利用状況の変遷

(出典:国土地理院)

山ノ井川流域(上流)の土地利用の変化を見ると、昭和 55 年と比較して平成 22 年は、大きな変化は見られない。

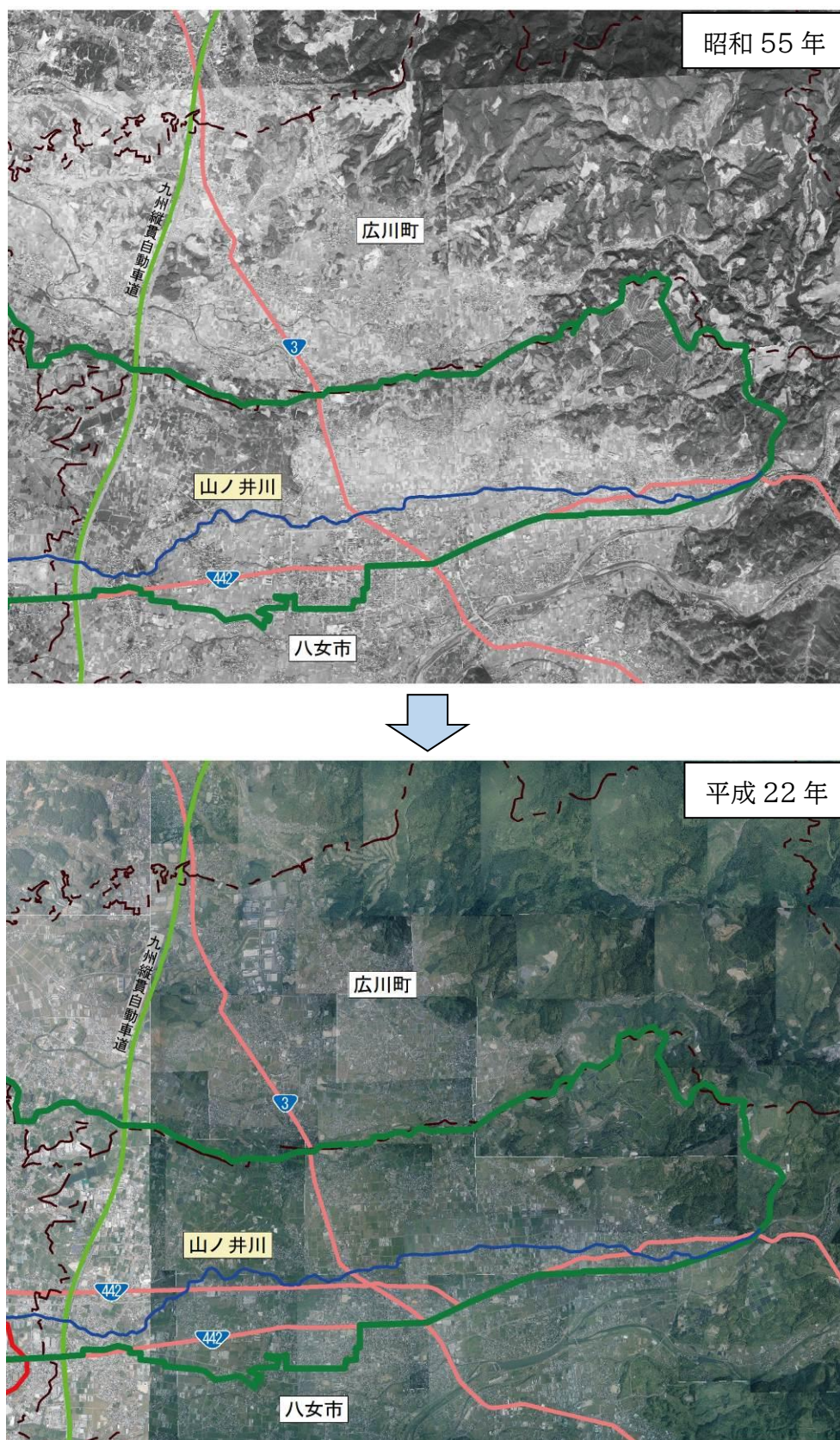


写真 2-2 山ノ井川流域(上流)の土地利用状況の変遷

(出典:国土地理院)